

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

教育改革・支援センター

（責任者名） 吉澤 結子

（役職名） 副学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>令和4年度の履修・修得状況は次の通りであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・システム科学技術学部：受講者244名、単位修得者226名 履修者に対する修了者の割合は92.6%である。 ・生物資源科学部： 受講者162名、単位修得者153名 履修者に対する修了者の割合は94.4%である。 ・全学： 受講者406名、単位修得者379名 履修者に対する修了者の割合は93.4%である。
学修成果	<p>全学において全科目で実施する授業アンケートの「目標理解」や「授業理解」等の設問から、学生が期待されたレベルに達しているか検証・確認している。主要科目の情報・データサイエンス基礎の「目標理解」及び「授業理解」については、回答した学生の評定平均が4.0/5.0点と、概ね内容の8割程度を理解していると自己評価しており、期待されたレベルに達していると考えられる。</p> <p>自由記述では、大学入学までPCやExcel、Word等のアプリケーションに触れる機会が無かった学生も見受けられ、「現代社会において必須であるExcelやWordなどの使い方を基礎から学ぶことができる。」、「WordやExcelの使い方に加え、インターネットについての知識も深めることができる。」、「説明の際も実際に動かしながらExcelやPowerPointのやり方を説明して下さるのでわかりやすい。」など、基礎から学べ、知識を深めていけるなどの肯定的な意見が複数見られた。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>令和4年度履修生を対象として実施した学生アンケートの設問に対して次の回答を得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業内容は理解できましたか？」→[肯定的な回答：81.3%、否定的な回答：15.6%、「わからない」3.1%] ・自由意見では「この授業でのコンピューターを用いた実習はしっかりとこなせていた。」との意見があった一方で、「学生によって理解のレベルにかなりの差がある。」、「難しい。何の知識もない人に教える感じで教えてほしい。」などの意見があった。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>令和4年度履修生を対象として実施した学生アンケートの設問に対して次の回答を得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「このプログラムは必修ですが、仮に選択だったとして、受講を後輩に勧めたいですか？」 →[肯定的な回答：68.8%、否定的な回答：23.4%、「わからない」7.8%] ・否定的な回答や「わからない」という回答を減らすために、授業アンケート結果を教員にフィードバックし、改善を図っていく。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>本教育プログラムを構成する科目については令和4年度から全学必修として開講しており、履修者数、履修率の向上にむけて推進している。計画は様式3の⑧に記載した通り*。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>当プログラムは本学では令和4年度からの開講であり、修了者は本学在籍中のため、進路等は評価できないが、今後可能な範囲で進路等の調査を実施する予定である。また次の回答の通り、主な就職先には本プログラムの内容を説明するとともに、産業界からの意見を聴取した。</p> <p>秋田県産業施策関連機関、および本学既卒学生の主な就職先企業から意見を聴取した。結果は、次のとおりであった。</p> <p>1) 文部科学省のモデルカリキュラムが求める内容を満たしているか？[肯定的な回答：83.3%、否定的な回答：16.7%]</p> <p>2) 現代社会でのデータ利活用状況への理解や関心を促すものか？[肯定的な回答：66.7%、否定的な回答：33.3%]</p> <p>3) 学生がデータリテラシーを身につけるために役立つか？[肯定的な回答：83.3%、否定的な回答：16.7%]</p> <p>4) データサイエンスの知識と技法（取扱い）の修得に役立つか？[肯定的な回答：66.7%、否定的な回答：33.3%]</p> <p>5) AIの原理や特性の修得に役立つか？[肯定的な回答：50%、否定的な回答：33.3%、不明：16.7%]</p> <p>その他自由意見では、「大学等が企業のニーズにあった数理・データサイエンス・AIの素養のある学生を輩出することで、大学等・企業・学生の好循環を生み出すという認定制度の趣旨を踏まえると、授業の一部で企業の事例を紹介するカリキュラムになっていることは、学生・企業の双方にとって価値のある」といった肯定的な意見もあれば、「実世界・社会におけるデータ・AI利活用の関わりについての学習が乏しく、数理・データサイエンス・AIを活用することが「好き」な人材を育成できるかという点で、深く興味を醸成するカリキュラムとは言い難い。」といった否定的な意見もあった。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>令和4年度履修生を対象として実施した学生アンケートの設問に対して次の回答を得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「このプログラムを受講して、数理・データサイエンス・AIについて学ぶ意義を感じましたか？」 →[肯定的な回答：82.8%、否定的な回答：15.6%、「わからない」1.6%] ・「このプログラムの授業は楽しかったですか？」 →[肯定的な回答：65.6%、否定的な回答：29.7%、「わからない」4.7%] <p>その他自由意見では「必要な内容だとは思いますが、内容が多すぎて、理解しきれなかった。情報社会であるのは事実であるから、社会で生きていくためには必要な授業だと思う。指導の問題というより、急速な情報化が問題であると思う。」「システム科学入門や科学技術史は、知識を蓄えるような講義で、工学の歴史(工学以外の全般的な歴史の話題も多かった)やある工学分野の専門的な教養の話であり、興味関心あるいは基礎的な知識がなければ受講する意義を感じられないのではないかと感じた。情報・データサイエンス基礎に関しては、一部のコンピュータができる人以外は受講によってWordやExcelの基礎的な操作を学習でき、実践に近い形で学べるため意義があると思った。」「これらの授業を通して、工学分野の幅広い知識を身に付けることができたので、とても参考になった。」等の意見を得られた。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>授業アンケートの結果が教員にフィードバックされ、教員は学生の「分かりやすさ」の観点から講義の内容・実施方法の見直しを検討することが可能である。また外部による授業評価や、FD活動として他科目の講義を見学する機会も提供している。</p>